

特集

これからの学校教育と森林ESD

学習指導要領改訂のポイントと森林ESD



森林ESDとは、森林分野と教育分野が連携・協働して、双方の視点と価値を併せ持った活動を展開していくことである。そうであるからには、私たち森林側は、教育側の目的やニーズを十分に把握することが大切だ。ここでは、この度改定された学習指導要領のポイントを紹介しながら、森林ESDの役割を考えてみる。

実生活の様々な場面で直面する課題にどの程度活用できるかを評価する調査である。2015年に行われたPISAは、世界72カ国・地域から約54万人が参加しており、日本からは約6600人が参加している。

このPISAで日本は、学力の平均得点が高い上位グループに位置し続けているのだが、森林というキーワードから見ると少々気になる結果が出ている。学力調査とは別に「あなたの科学についての考え」を質問しているなかで、「土地開発のための森林伐採の影響」について「よく知っており、詳しく説明できる」という回答は、上位約30%に

明することができる」と回答した生徒の割合が、OECD平均を上回っている(図1参照)。

「この結果は、子どもたちは森林の問題を知識として持っている、社会的課題として捉えていない、そして知らないからこそ、ある意味で楽観的な将来感を持っていると解釈することもできるでしょう。日本では、PISAの学力部分の結果だけを見て、上がった、下がった、

森林問題は社会的課題として捉えられていない?

国際経済全般について協議することを目的とした国際機関で、世界最大のシンクタンクとも呼ばれ

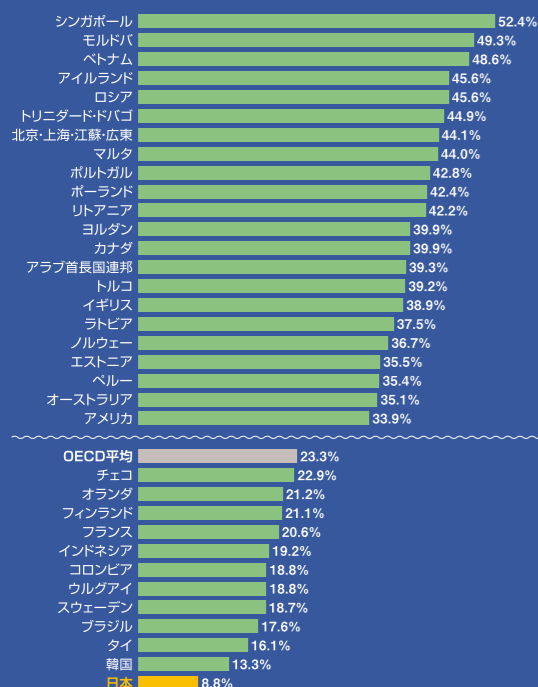
る経済協力開発機構(OECD)が2000年以降3年ごとに実施している「生徒の学習到達度調査(PISA)」をご存じだろうか。これは、義務教育課程終了段階の15才児が持っている知識や技能を、

開発のための森林伐採の影響」について「よく知っており、詳しく説明できる」という回答は、上位約30%に

果だけを見て、上がった、下がった、

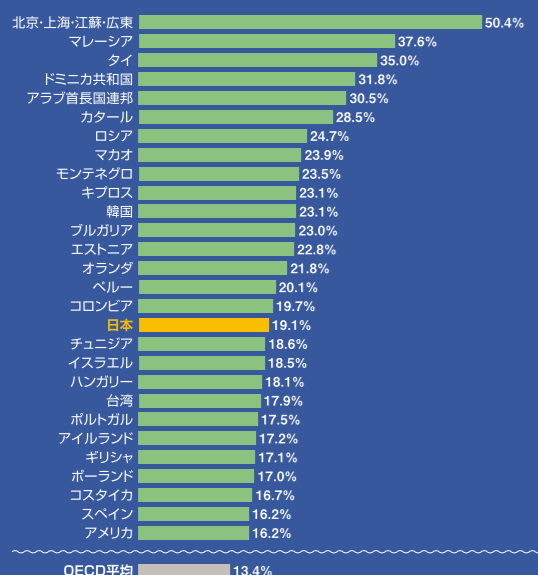
■図1 OECD-PISA2015(環境問題の知識)における日本の生徒の状況

●「土地開発のための森林伐採の影響」について、「よく知っており、詳しく説明することができる」生徒の割合 = 世界ワースト1位(69カ国中、69位)



*「あなたは、次の環境に関する諸問題についてどのくらい知っていますか」という問いで、①大気中の温室効果ガスの増加、②遺伝子組み換え生物の利用、③核廃棄物、④土地開発のための森林伐採の影響、⑤大気汚染、⑥動植物の絶滅、⑦水不足について、「聞いたことがない」「聞いたことはあるが、それが何かを説明することはできない」「ある程度は知っており、問題について大まかに説明できる」「よく知っており、詳しく説明することができる」のうち当てはまるものを選ぶ

●「土地開発のための森林伐採の影響」について、今後20年間で「改善される」と思う生徒の割合 = 世界第17位(57カ国中、上位約30%)



*「あなたは、次の環境に関する諸問題が今後20年間で改善されると思いますか。それともますます悪化すると思いますか」という問いで、①大気汚染、②動植物の絶滅、③土地開発のための森林伐採、④水不足、⑤核廃棄物、⑥大気中の温室効果ガスの増加、⑦遺伝子組み換え生物の利用について、「改善される」「今と変わらない」「ますます悪化する」のうち当てはまるものを選ぶ



国土緑化推進機構は、学校教育を介して森林と地域(行政・企業・森林NPO等)をつなぐ「森林ESD」を推進している。「ぐりん・もあ」では、2015年のVol.68で特集「ESDと森林」を組み、森林ESDの考え方などを紹介したが、その後、2016年に改訂された『森林・林業基本計画』では、森林環境教育等を充実に向けて教育関係者等とも連携して推進していくことを明記、また2017年には小・中学校の学習指導要領が改訂されるなど、森林ESDを取り巻く状況も変化してきている。今回の特集では、こうした変化のポイントを紹介しつつ、あらためて森林ESDの意義や、学校教育に森林・林業が果たせる役割などを考えてみる。

■図3 これまでの「森林環境教育」の実践と求められる「森林ESD」

(山下宏文氏(京都教育大学・教授)作成資料をもとに国土緑化推進機構で作成)

分類	森林分野に多く見られる視点		教育分野で求められる視点	
in	経験主義 (森林総合利用)	森林での体験活動(森林総合利用)をすること目的	資質・能力主義 (森林を活用した体験学習・調べ学習・問題解決型学習等を通して、多様な資質・能力を育む)	体験活動を通して豊かな感性・人間性やコミュニケーション力・主体性等を育む
about	知識主義 (普及啓発)	森林について正しく知ってもらうことが目的		森林を題材にすることで多面的・総合的なものの見方や思考力、持続性の考え方を学ぶ
for	実践主義 (国民参加の森林づくり)	森林でボランティア活動することが目的		森林の多面的機能の受益者の立場から、当事者意識を持ちながら、課題を把握し、解決策を考え、行動する態度を育む

これまでの「森林環境教育」の実践
(上記のいずれかの実践活動としての取り組みが多い)

これから求められる「森林ESD」
(多様な実践に教育視点を加味し、全体を統合)

→「森林分野」と「教育分野」が連携・協働して、双方の視点と価値を併せ持った活動を展開

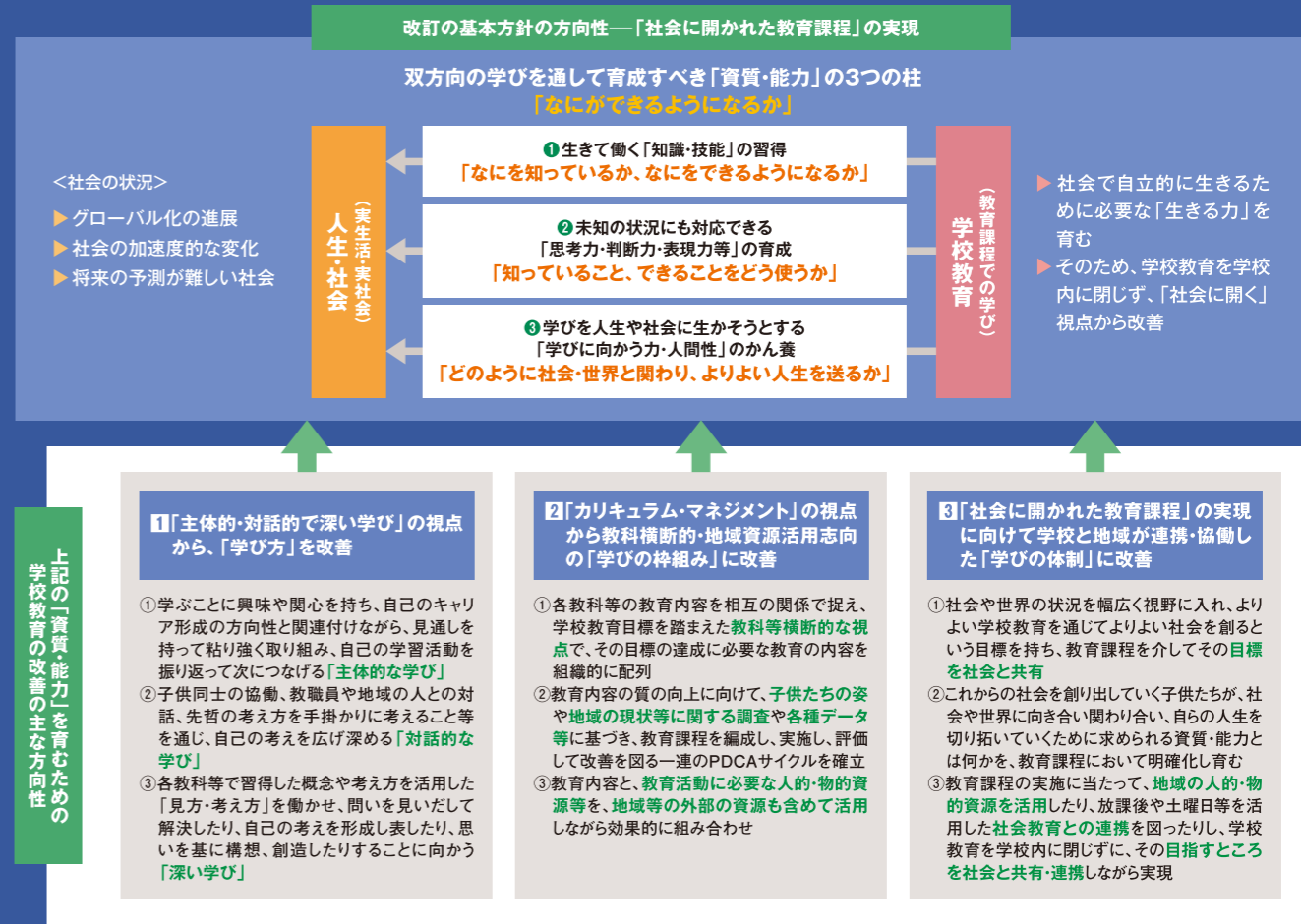
「基本的には現行の学習指導要領と大きく変わったわけではありませんが、現行までは教科ごとに教育目標を設定していたのに

授業のまとまりの中で、習得・活用・探究バランスを工夫することが重要。ここから改訂のポイントのキーワードを拾うとすれば、「未来社会を切り拓くための資質・能力」「社会に開かれた教育課程」「現代的な諸課題に対応」「教科等横断的」ということになる。基本的には現行の学習指導要領と大きく変わったわけではありませんが、現行までは教科ごとに教育目標を設定していたのに

「環境教育の要素には「in」「about」「for」について(環境に関する正しい認識)」「for」(環境をより良くする態度、参加)の3つの視点があり、環境教育のねらいは、これらがバランスよく統合されることによる環境問題の解決とよりよい環境の創造が図られることにある。もちろん森林環境教育でも同じことがいえるのだが、「in」=森林での体験活動をする(経験主義)」「about」=森林について正しく知ってもらう(知識主義)」「for」=森林でボランティア活動をする(実践主義)」の3つが目的(実践主義)のいずれかに偏りすぎていた傾向があったことは否めないし、そのことが今回のPISAの結果につながっているともいえる。

■図2 「学習指導要領」改訂の方向性と地域社会との関わり(イメージ)

(中央教育審議会「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の次期学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」(平成28年12月21日)をもとに、国土緑化推進機構で作成)



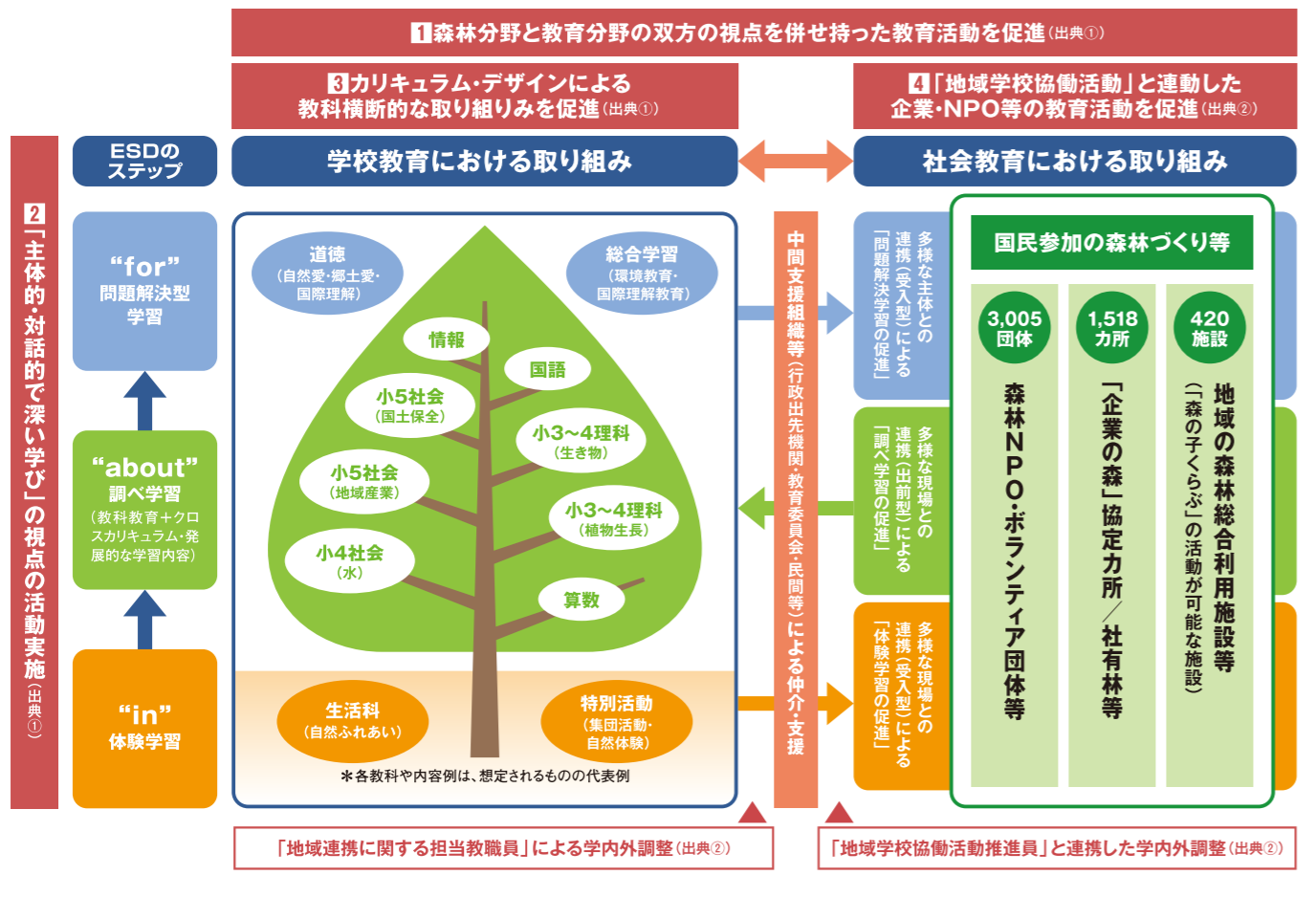
という話題にはなりますが、アンケートレベルの結果はあまり問題にされません。こういった実態を私たちはもっとアピールしていく必要があるのではないかと思います」と言うのは、京都教育大学教授で「企業・NPOと学校・地域をつなぐ森林ESDに関する研究会」座長の山下宏文さん。

「ト」から、主要部分を抜粋してみたい。今回の改訂の基本的な考え方は教育基本法、学校教育法などを踏まえ、これまでの我が国の学校教育の実践や蓄積を活かし、子供たちが未来社会を切り拓くための資質・能力を一層確実に育成。その際、子供たちに求められる資質・能力とは何かを社会と共有し、連携する「社会に開かれた教育課程」を重視。

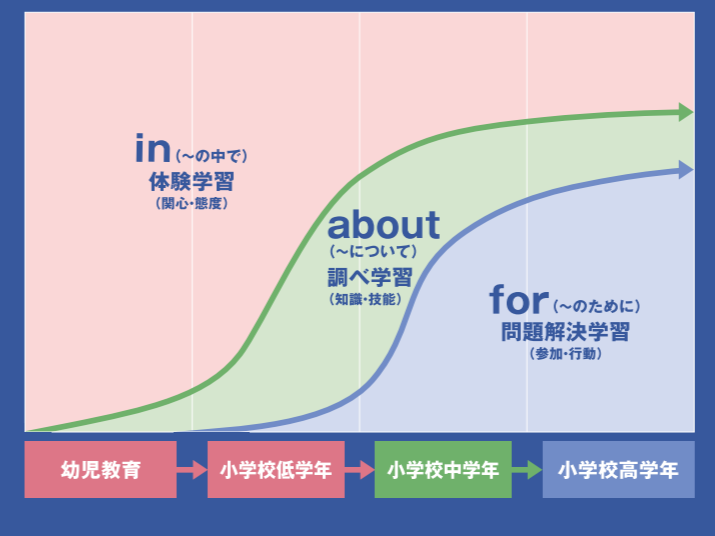
■図5 森林ESDの4つのポイントと、促進の仕組み(イメージ)

1 森林分野と教育分野の双方の視点を併せ持つ 2 「主体的・対話的で深い学び」の視点 3 教科等横断的な視点を持った教育活動 4 「地域学校協働活動」と連動した企業・NPO等の教育活動を促進

<根拠となる参考資料>
出典①:中央教育審議会 教育課程特別部会 審議のまとめ案(平成28年8月)の内容と対応
出典②:「次世代の学校・地域」創生プラン(平成28年1月)に記載の実施内容と対応



■図4 子どもの発達段階に応じた段階的な森林ESDの推進(イメージ)
(「生涯学習と環境教育」阿部、1993年を元に加筆)



ように、in、about、forを統合した資質・能力主義を掲げているということもできるでしょう。こうした視点で、これからの森林環境教育にも必要なのです。一方で学校側は、資質・能力主義で子どもを育てていくために、なにを題材にした方がいいかを模索しているところです。それならば、森林分野と教育分野が連携・協力して森林を題材とした学校教育を展開していけば、森林側にも学校側にもメリットがあるんじゃないか、というのが森林ESD

Dです。そして、森林ESDが育てようとしている力は、学習指導要領でいうところの現代的な諸課題に対して求められる資質・能力そのもののものです」と山下さん。
2016年に改訂された『森林・林業基本計画』では、「森林環境教育等の充実」として次のように明記されている。
ESD(持続可能な開発のための教育)に関するグローバル・アクション・プログラムがユネスコ(国際連合教育科学文化機関)総会で採択され、我が国においても、ESDの取組が進められていることを踏まえ、持続可能な社会の構築に果たす森林・林業の役割や木材利用の意義に対する国民の理解と関心を高める取組を推進する。具体的には、関係府省や教育関係者等とも連携し、小中学校の「総合的な学習の時間」における探究的な学習への学校林等の身近な森林の活用など、青少年等が森林・林業について体験・学習する機会の提供や、木の良さやその利用の意義を学ぶ活動である「木育」を推進する。国有林においても、フィールドや情報の提供、技術指導等を推

学校側とすれば、「未来社会を切り拓くための資質・能力」「社会に開かれた教育課程」「現代的な諸課題に対応」「教科等横断的」「地域」といったキーワードに沿い、かつ学校教育で求められている子どもたちの資質・能力を育むことができる内容であれば、その学習対象はある意味でなんでもよい。エネルギー問題などの諸環境問題がライバルとなるなかで、いかに森林をアピールしていくのが、大きな課題となる。
「国土の3分の2が森林という国ですから、ほとんどの学校にとって森林は身近なものであるはずだし、地域の課題としても捉えることができるはずなんです。これまでは身近すぎて問題視されていなかった部分もあるかも知れませんが、地域の持続可能な資源といった視点や、自分たちの暮らしに密着している資源として見てもらうことは大切です。そうなれば地域の森林NPOとの連携といった面も重要になってくるでしょう。その面では、日本は各地に森林に関連した活動をしているNPOがありますから、それも強みとしてアピール

森林ESD推進のための課題

ESDとは「これらの現代社会の課題を自らの問題として捉え、身近なところから取り組むことにより、それらの課題の解決につながる新たな価値観や行動を生み出すこと、そしてそれによって持続可能な社会を創造していくことを目指す学習や活動(文部科学省We bサイトより)」であり、この考え方や学校教育方針の多くが重なっていることは間違いない。しかし、現代社会の課題といわれても対象が広すぎるため、ESDという言葉そのものは非常に曖昧な部分もあり、学校側に浸透しているとはいえない状況だ。
「そんななかで森林ESDは、現

代社会の課題のなかでも森林問題と限定しているわけですから、学校側にアピールしやすいはず。逆に言えば、PISAで森林問題が課題として捉えられていないように、残念ながら森林が現代社会の課題、地域の課題として捉えられていない現状を踏まえれば、森林問題は現代社会の重要な課題であることを、もっとアピールしていく必要があるでしょう。例えば資源エネルギー庁は、学習指導要領に沿ったプログラムや副読本をつくらせて、全国の全小中学校に申込用紙を送っています。そうしたものがあっても、学校側は関心を示してくるはずなんです」と山下さん。
また、学校側へのアピール材料として大きいのは、森林ESDに取り組んだことによる成果を提示することだと山下さんはいう。
「全国の小中学校の最高学年を対象に行われている全国学力テストでは、知識を問うA問題と、知識を活用する力を問うB問題があり、いま学校教育で求められている子どもたちの資質・能力は、B問題に回答する力です。エネルギー環境教育に取り組んだ学校がB問題の成績を上げたという事例がありますから、森林ESDもそうした成果を出せるはずなんです。そんな事例をつくっていくことも、これからの課題といえるでしょう」
現在、「企業NPOと学校・地域をつなぐ森林ESDに関する研究会」での議論や各都道府県での意見交換会などから、森林ESD推進のための道筋が見えてきたところだ。森林ESD推進のための具体的なアクションは、これからである。
※森林ESD推進の考え方については、国土緑化推進機構のWebサイトもご覧ください。



「出前講座」で、ステンレス缶をつかっての飾り炭づくり(雲南市立掛合小学校5年生:特集2参照)